
秋桜 - another story -

七地

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋桜 - another story -

【Nコード】

N2902BA

【作者名】

七地

【あらすじ】

「秋桜」web拍手の御礼SSや、番外編などの短編集です。

本編を読まれてからの方がお楽しみ頂けるかと思われます。

不定期に更新していく予定です。

不安 side:コジ(前書き)

秋桜本編「嫉妬(2)・(3)」のサイドストーリーです。

不安 side:コジ

札幌からオレ達の姫が帰ってきた。

チームの先輩から聞かされていたオレは姫に会えるのを楽しみにしていたんだ。

尊敬している葵さんと愁さんが大切にしている女の子なんて一体どんな人なんだろう？

みんなと『きつとすげえ可愛いんだろうな』って話していた。

初めて梨桜さんに会って挨拶をしたときにはいろんな意味で驚いた。

梨桜さんはオレ達が想像していた以上に可愛い。

それと・・・これは絶対に言えないけど、葵さんとは双子だと思えないくらい・・・優しい。

優しい梨桜さんをチームの皆が大切にしようと思っている。

でも、彼女はオレ達のライバルチームのトップ達が通う高校に通っていて、皆が心配していた。

そんな時、葵さんがキレる事件が起こったんだ。

その日、オレと愁さんは昼休みに生徒会室で雑誌を読んでいた。葵さんはまだ学校に来ていないそうだ。

バン！！

ものすごい音がして生徒会室の扉が開いた。

「ドアが壊れるっつーの・・・なにキレてんだよ」

愁さんが読んでいた雑誌から顔を上げ、葵さんを見て驚いた顔をしていた。

オレもこんなに冷たい表情の葵さんを見るのは初めてだった。

この人が冷静を欠くなんて珍しい。

「何があつた？」

「朱雀を潰していいか？」

唐突に言い出した葵さんに、愁さんは眉を顰めた。

「ダメに決まってるんだろ。梨桜ちゃんに何があつた？」

愁さんが言うと葵さんは紙切れをテーブルの上に叩きつけるように置いた。

「これ・・・」

「梨桜の鞆に入ってた」

愁さんは書かれている文字を読んで舌打ちしていた。

オレもその紙を見て腹が立った。『ふざけんな』そう思った、梨桜さんは好きで生徒会に入ったんじゃない。

「これを書いた奴を探し出して連れて来させる」

怒りのオーラを纏った葵さんに愁さんは冷静に「駄目だ」と言った。

「梨桜は怪我をして帰ってきたんだぞ！？昨日から熱を出してるんだ！黙ってるって言うのか！？」

普段、声を荒げることをしない葵さんが怒鳴った。

「どこを怪我した？」

愁さんに「落ち着け」と言われて、葵さんはソファに座り天井を仰いで深く息を吐いた。

梨桜さんは大丈夫なのか？

「左手首を捻挫した。躓いて転んだと言ってるけど、嘘だろ。突き飛ばされたか足をかけられて転ばされたんだ・・・」

ウチの姫に何てことしてくれたんだよ！？葵さんがキレるのも当然だ。朱雀を潰しに行くならオレも行きたい。

そう思っただけを見たと腕を組んで何か考えているようだった。

「熱が出てるって言う事は・・・そうだな。転ばされて背中を痛めたんだろうな」

熱が出るという事と背中を痛めるという事の関連が分からないオレに愁さんは「今度教える」と言っただけ目を閉じた。

「ウチの学校に転校出来ないかな」

葵さんがぼやいた。

「無理に決まってるんだろ」

愁さんが目を閉じたまま答えた。葵さん・オレも無理だと思いません。

「じゃあ、藤島を殴らせろ」

極論に思わず笑ってしまいそうになった。

「葵、今おまえが動いたら意味ないだろ？落ち着けて・・・」

愁さんが冷たく笑い、紙切れを眺めた。

「藤島にやらせようぜ？悔しいけど紫苑のトップは奴だ」

「オレ、アイツ嫌い」

少し拗ねたように言う葵さんが可愛く見えてしまった。

こういうところ、梨桜さんと似ているかもしれない。

「同族嫌悪か？大丈夫だ、奴もお前の事嫌いだろ。・・・明日は定例会だ。絶対にキレんなよ？」

愁さんは繰り返して「わかったな？」と言い、葵さんは渋い顔をしながら頷いていた。

次の日

朱雀を利用して梨桜さんを守ろうとさせている葵さんと愁さんを恐ろしいと思った。この人達を敵に回したくない。

そして、オレは藤島と幹部の反応を見て心配になった。

梨桜さんを奴らに奪われるんじゃないか・葵さんがそんなことをさせるわけがないのにバカみたいな心配が頭に浮かんだ。

見えない火花 side:コジ(前書き)

秋桜 本編「定例会(4)・(5)」のサイドストーリーです。

見えない火花 side:コジ

「梨桜ちゃんの具合は？」

午後から学校に来た葵さんに愁さんが聞くと疲れた顔で首を横に振っていた。

「熱が下がらない。お粥食わせて寝かしつけてきた」

「夜まで下がらないようだったら往診するようにつづよ」

「悪いな、頼む」

葵さんは生徒会室のソファに横になって寝てしまった。熱を出した梨桜さんを見ていたそうだ。

「昨日会議を中断したから今日も朱雀が来るけど」

葵さんは舌打ちした。

「あいつら、本気なんですか？梨桜さんを朱雀の幹部にするなんて」

昨日、大橋が突然言い出したんだ。『梨桜ちゃんは朱雀の幹部だ』ふざけるなって思った。

「オレと葵がさせないよ。梨桜ちゃんは青龍の大切なお姫様だからね」

そうだ、彼女はオレ達の姫なんだ。

「オレと姉弟なのは伏せるよ？」

「そこら辺は大丈夫。昨日梨桜ちゃんも「弟が」って連呼してたし、まさか自分より学年が上の弟なんて思いつかないだろ」

朱雀との会議。

毎回、この会議に意義があるのかどうかは分からないが、青龍と朱雀ができた時からの決まり事だ。
葵さんと藤島の機嫌は最悪だった。

「ウチの梨桜は体調不良で欠席」

朱雀副総長の大橋が言う。「ウチの」発言に愁さんと葵さんが反応する。

「昨日は梨桜が世話になった。礼を言う」

藤島の言葉に葵さんの顔が凍りついた。

あゝあ、怒りの沸点を超えた。いや、葵さんの場合は氷点か？
今日、葵さんがチームに来たら絶対、荒れる。

「梨桜ちゃんはこれから、ウチの病院でしっかりケアしていくからご心配なく」

愁さんが黒い笑みを浮かべた。今度はそれに反応する大橋。
梨桜さんの素顔を知らないはずの朱雀がこんなに彼女に執着してい

るなんて、やっぱりオレは不安になる。

その時、葵さんの携帯が鳴った。画面を見た葵さんの表情が一瞬、軟らかくなった。きっと梨桜さんからだ。

「どうした？」

声が何時もの100倍優しい葵さんは隣の部屋に入ってしまった。

「宮野もあんな顔するんだな」

大橋が葵さんの入った部屋のドアを見ながら呟いた。

「早く終わらせようぜ」

愁さんが言い会議が始まった。

そくだ。早く終わって葵さんを家に帰してあげたい。

休憩に入り葵さんはどこかに電話した

「リンゴジュースとプリンを買ってきてくれないか？ああ、いつものヤツ。宜しく」

簡潔に言って電話を切った。

「なんだ、おねだりの電話？」

愁さんがからかった。

梨桜さんはいつもリンゴジュースを飲む。

オレが買い物に行くときにはプリンも頼まれる。いつものメニューが出てきたということは熱も落ち着いたんだらうか？

「葵さん、オレ行きますよ？」

「大丈夫だよ。悪いなコジ」

葵さんは梨桜さんの話をするときは表情が軟らかい。

会議が再開される直前にコンビニで買ってきたリンゴジュースとプリンが届けられた。

「葵さん、オレ冷蔵庫に入れてきます」

「宜しく」

葵さんから袋を受け取って、隣の部屋に置いてある冷蔵庫に入れた。

会議なんかいいから早く帰って梨桜さんについてあげて欲しい。

会議が終わると葵さんは帰った。

「今日はお宅の総長の意外な顔を見せてもらったよ」

大橋が言った

「そうっ？ウチでは普通だけどね」

愁さんが軽くあしらった。

某所にて…（前書き）

秋桜本編「進路相談と大好きな人」のサイドストーリーです。
会話メインです。

某所にて…

- - 都内某所 - -

「慧さんおかえりなさい」

バーで二人の男が並んでグラスを傾けていた。

「ここら辺も変わったな」

慧が呟くと、隣に座っていた男が小さく笑った。

「まあ…それより、どうするんですか?」

「取りあえず、両方に釘をさしてきた」

慧はそう言い、残り少なくなっていた酒を一気に喉に流し込んだ。

「へえ…」

「葵も藤島もムツとしてたな。まあ、アイツらはアイツらなりに考えながら動くこうとしてるんだろうけどな。ガキだよ」

「梨桜ちゃんには甘いのに、葵には厳しいんですね?」

「葵も梨桜もオレの可愛い双子ちゃんだぞ?まあ、葵は男だからな。多少は厳しくしないと。梨桜はアレだ。目に入れても痛くないほど可愛い。ってやつだ」

・相変わらずですね・そう言い、隣に座る男もグラスを煽った。

「落ち着いたらオレは赴任先に向かう」

「折角帰国したのに、梨桜ちゃんが聞いたら悲しむでしょうね」

「仕方ねえだろ、世話になった恩師に呼ばれたんだ」

「まあ、仕方ないですね」

「オレがいない間、朱雀と青龍の面倒を見てやってくれ」

「アイツらガキだからな・・・」

慧は溜息をつく男を笑いながら見て、口を開いた。

「涼、頼んだぞ」

「慧さんの頼みなら仕方ないですね・・・」

虫除け side:悠(前書き)

秋桜本編 「眠り姫と攻略法」(4)・(5)のサイドストーリー
です。

虫除け side:悠

「寝るな、余計に重くなる」

聞こえているのかいないのか…宮野に凭れたまま目を閉じている梨桜ちゃん。やっぱり彼女の寝顔は可愛い

「慧兄退けて、重い」

梨桜ちゃんを支えている宮野が言うと、寛貴さんが彼女の顔を覗き込んだ。

「顔が赤くないか？」

その言葉に、宮野が彼女の頬と首筋に触れて熱を確かめていた。

「梨桜、熱を測るぞ」

そう言っつて宮野は梨桜ちゃんの耳に体温計を当てると“ピッ”という電子音がして宮野が体温計を見て眉を顰めた。

「…梨桜、薬飲んで寝ろ」

初代が宮野の前に立って屈むと、梨桜ちゃんを抱き上げてリビングを出て行った。右腕をさすりながら宮野が体を起こしテーブルに置いた食器を片付け始めた。

「梨桜ちゃんて、いつから学校に行くんだ？」

三浦が聞き、オレもそれを聞いたかつたから宮野の答えを待った。彼女が居ないのは寂しいから、早く学校に来てほしい。

「月曜からの予定。まだ無理だつて言ってるけど、単位が足りなくなつたら困るから学校に行くつて言い張ってる」

「なあ、梨桜ちゃんてホントは高2？」

拓弥さんが聞くと宮野が頷いた。

「事故に遭つてなかつたら、オレと梨桜ちゃんて同級生になれたかもしれないつて事だよな？」

その言葉に宮野の鋭い視線が向けられた。

「冗談じゃない。女子校に転校させる！…：そういうば、さっき何か隠してたよな？」

宮野が段ボール箱に手を伸ばすと寛貴さんがそれを止めた。

「待て、梨桜宛ての荷物だ」

「梨桜はオレに隠し事はできないからどうせバレるんだよ」

だったら、今見ておいて面倒事への対処を考えた方がいい。

納得できるようなできないような事を言い、宮野は強引に箱を開けて中から何かを取り出した。

「なんだこれ」

出てきたのは紙の束…？否、手紙だ。

宮野は封筒を捲りながら、宛名を読んでいた。

「東堂 梨桜 様、梨桜ちゃんへ、東堂 様、梨桜さま…アイツ、転校してもこんなもんが来るのか」

もしかして、梨桜ちゃん宛ての男からの手紙？

「梨桜ちゃん、相変わらずモテてるな。まさか、連絡が取れないからって“タカちゃん”が手紙を託されてるのか？」

「そう言えば、去年も『タカちゃんの下駄箱に入れられるのを渡されて困る』って言ってた…」

「捨てちまえよ」

寛貴さんが言つと宮野が手紙の束をゴミ箱に投げ入れた。

「うっわ、おまえらって酷え…」

拓弥さんが眉を顰めて言つと、三浦がフツと笑った。

「お姫様は箱入りだからな、虫除けも念入りにしてやらないと…なあ？葵」

お姫様に近づく虫は、呆気なくポイツと捨てられるんだ…

オレも捨てられないように気を付けよう…

.

約束 side:ロジ(前書き)

秋桜本編「Flowers」(5)「」のサイドストーリーです。

約束 side:コジ

梨桜さんと5代目の約束

- 1・インストラクターがいるところ以外では泳がない。
 - 2・体を冷やしたままにしない。
 - 3・水着は競泳用の水着を着用すること。（当たり前だ。5代目は何を考えてんだ…）
 - 4・他の会員に声をかけられても相手をしない。
 - 5・必ず葵さんが藤島に送り迎えをしてもらうこと。（ナンパ防止らしい）
- これを一つでも破ったら、梨桜さんは京都に送られるらしい。
オレ的には4番目の約束が一番危ないと思う。

ガラス張りになってる屋内プールが見える休憩室から、インストラクターと一緒に笠原さんに泳ぎを教えている梨桜さんが見える。
『麗香ちゃんが水に浮かべるようになったんだよ』と嬉しそうに言っていたけれど、下で練習している彼女を見る限り、ぎこちないけれどクローンをできるようになってきたらしい。

彼女も頑張っている。

自分で泳いで、手本を見せながら、腕の動かし方を教えている。
友達の為に一生懸命だ。

「梨桜さんて綺麗に泳ぐんですね」

人魚姫みただ。

「待たせてごめんね！」

練習を終えた梨桜さんは濡れ髪のまま駆けてきた。

「いつも走るなって言っただろ」

笠原さんを見送って、迎えに来た桜庭の車に乗り込む。

梨桜さんは葵さんに髪の毛を拭かれながら笑って言った。

「お腹空いた」

今までなら梨桜さんの口から滅多に聞くことなかった言葉。水泳を教えるようになってから聞くようになった。

まだまだ小食だけど、前よりは食べられるようになったと思う。

「これも美味しいね」

目の前で葵さんが食べていた炒飯をパクついている梨桜さん。

5代目が水に入る事を許可したのはこの為だったんじゃないかと思

えてくる。

お腹が一杯になれば眠くなるらしい。

今日は葵さんに寄りかかって寝ている。

この前は定番の膝枕だった。

幸せそうな寝顔を見ながら…ふと気になった。

5代目が出した約束の一つ。 『必ず葵か藤島に送り迎えをしてもらうこと』

梨桜さん…藤島に迎えに来てもらっても同じように無防備に寝てるんですか？

もしも、この寝顔を奴等の前で晒しているとすれば…藤島と海堂が気の毒に思えてしまう。

オレは、どうしても気になって海堂に聞いてみた。

「梨桜さんて、水泳を教えた後って何してんの？」

海堂の答えはある意味想像通りというか…

『普通に夕飯食って、オレに課題を教えるか…寝てる』

「一人で？」

『当たり前だろ！ソファでうたた寝をしていると寛貴さんが総長室』

のベッドに運んで寝かせてるよ』

藤島、あの寝顔を見ても耐えてるんだ…すげえ理性だな。

「おまえんとこの総長、すげえな」

『あ？どういう意味だよ』

おまえにあの寝顔の破壊力が分からねえならいい…

水泳を教え始めて1週間が経とうとしている頃、梨桜さんのお迎えに着いて行くと笠原さんに飛び込みを教えていた。

手本を見せている梨桜さん。

これでマジじゃないんだ、と驚いた。
綺麗なフォームで水に飛び込み、しなやかな動きで水をかいて進んでいく。

遠目からだけど、泳ぐことが楽しいって伝わってくる。

葵さんはずっと梨桜さんを見ていた。

命懸け side…コジ(前書き)

秋桜本編「背中越しの・・・」おまけです。

命懸け side…コジ

梨桜さん！オレ幸せですっ！！

ありがとうございます！！

「すげーっ！！」

「いただきますっ！！」

山のように盛られた…毛ガニ、ズワイ蟹、タラバ蟹、花咲蟹…
北海道土産に蟹をこれでもか！っていうくらい買って来てくれた。

なんでも、総長・副総長4名を従えて市場まで行って買ってきたらしい。

オレと海堂は幹部室で食べているけど、外では下の奴等がバーベキューをしている。

「葵さんは食べないんですか？」

必死に蟹を剥いていると、葵さんは首を横に振った。「愁さんは？
と聞くと愁さんも首を横に振った。

「お前達に買ってきたんだから、心ゆくまで食べ。オレ達は…当分いい」

は？

藤島も大橋も蟹から目をそらして遠くを見ている。
見たくないくらい食べてきたって事か…

「梨桜ちゃんは？」

蟹を頬張りながら海堂が聞くと、愁さんが親指を部屋の外へ向けた。

「葵の我儘を叶えるために奮闘中」

「…ひでえ」

『いなり寿司食いたい…梨桜、作って』突然言い出した葵さんに梨桜さんは『しょうがないなあ』と言いながらキッチンに籠っている。

「葵！手伝って」

扉を開けた梨桜さん。

エプロン姿が可愛い。

「あ…皆、来てたんだ。お昼にはまだ早いけど食べる？」

「食いたい！」

「ああ」

葵さんが大皿をテーブルに置いた。

すげえ…あの短時間でこんなに作ったんだ！？

いなり寿司とホタテのサラダとエビの…なんだこれ？旨そう汁物

「梨桜さん、これなんですか？」

「海老しんじよのお吸い物だよ。手抜きだから期待しないでね」

ふわふわしていて旨い。手抜きなんて言わなきゃ分からないのに…

梨桜さんがオレを見てる。

テーブルに頬杖をついて、じーっとオレを見ている。

…そんなに見つめられると緊張する。

「梨桜さん？オレの顔になんかついてますか？」

うん、と頷く梨桜さん。

自分の頬をツンツンと突いて「蟹がついてるよ」と教えてくれた。

「コジ君、蟹を剥くの苦手？」

笑顔で聞かれて、ついドキドキしてしまった。

「…難しいっす」

「剥いてあげる」

ハサミを手にすると、蟹を剥き始めた。

「…」

向かいに座っている海堂にめちゃくちゃ睨まれた。

でも、譲りたくない。
梨桜さんに剥いてもらった蟹を食べるって贅沢だ！！それだけで倍は旨く感じる。

「ほら、キレイにできたよ」

蟹の爪を器用に剥いた梨桜さんが「ハイ」とオレに手渡してくれた。

「いただきますっ」

梨桜さんは楽しそうにしながら蟹を次から次へと剥いていく。
いつものように葵さんに寄りかかりながら…。

「そんなに剥いて誰が食うんだよ」

「コジ君と悠君だよ」

「おまえ、大して食わないのに剥くのは好きだよな」

「キレイに剥けた時って気持ちいいでしょ」

そう言うと、「ほら、剥けた！」と蟹の爪をオレの顔の前に出した。

「ハイ、コジ君」ニッコリ笑われて…

これはいつも葵さんになっている、アレ？

…梨桜さんは、この視線に気づいていないんだろうか？

「」「」「」

梨桜さんに『あーん』ってやってもらいたい。

でも、それをやったら…オレは3回死ぬような気がする。

「コジ君、食べないの？」

小首を傾げて聞かれたら……

「いただきますっ」

3人の夏休み (1)

「…んだよ、何か言いたいわけ？」

「自分ばかりズルいと思わないのか」

「思わねえよ」

……良く分からないんだけど、言い合いの声で目が覚めた。

「いや、ズルいだろ。代われ」

「オレ、免許持ってねえよ。よそ見しないで運転してくれよ」

「可愛くねえな、おまえは！オレにも膝枕させろ！」

「ハイハイ。騒ぐと起きるぞ」

起きてるんですけど…

うるさくて目が覚めました！

『夏休みは鎌倉の海に行きたい！』慧君がお願いを聞いてくれて、東京から鎌倉へ向かう途中。

眠くなって葵の膝枕で寝ていたんだけど…何故か言い合いをしている慧君と葵。

「何で梨桜はお前の膝枕でばかり寝るんだよ」

「そんなの決まってるんだろ？“オレ”だからだよ」

何だその理由…
当の本人でも分からないぞ。

起きよう。そう思って眼を開けたら、葵と目が合った。
何を言い合ってるの？

視線で聞いたたら、フツと笑って大きな手が私の眼を覆った。

“起きるな”って事らしい。

「とにかく、葵！おまえばっかりズルいぞ」

「そんな事言われたって知らねー」

楽しそうに言いながら、葵の親指は私の目尻を撫でている。

「昔は可愛かったのに」

「しょうがないんじゃない？慧兄に似たんだから」

葵ってば、慧君をからかって楽しんでるんだ。

素直に甘えればいいのに、ひねくれ者なんだから…

「…梨桜も梨桜だ」

え、私？

「いつも葵と一緒に昼寝しやがって」

そんな…いつも『葵と一緒に昼寝しなさい』って言ってたクセに

滅茶苦茶だよ、慧君。
葵は私の上で、ククツと笑っている。

スルスルと頬を撫でられる感触が心地良くて、また眠ってしまった。

「乗り物酔いはしてないか？」

「うん」

私の前髪をクシャクシャにして聞く葵に頷いた。

「オレの運転で酔う訳ないだろ。失礼な奴だな」

慧君の言葉に「スピード狂だったクセに」と葵がボソリと呟いていた。

うん、泣く子も黙る初代総長だったんだよね…紫苑と東青の強者どもを束ねていたなんて、この優しい笑顔からは想像できないけど…

駐車場に車を停めて、お祖父ちゃんの家のお玄関を開けると、少し空気が淀んでいたけれど懐かしい匂いがした。

ママと慧君が育った家。

ここに、お祖父ちゃんとお祖母ちゃんはもう居ないけれど、葵と夏休みを過ごしたこの家に来たかったの。

慧君、連れてきてくれてありがとう。

「梨桜！」

荷物の整理を済ませて、葵と食事の準備をしていると慧君に呼ばれた。

「慧君どうしたの」

「姉貴が若い時に着ていた浴衣が出てきた」

座敷に広げていたのは一枚の浴衣だった。

白地に百合と撫子が描かれている綺麗な浴衣。ママが着たら似合うだろうな…

「花火大会に着て行くか？」

「うん！」

3人の夏休み (2)

「…」

「ねえ、どっちがいいと思う?」

「おまえ、マジで着れると思ってんの」

「可愛いの選んだもん。着るよ」

ホルタ ネットのビキニにはフリルのミニスカートがついていて、可愛い。

もう一つは慧君と一緒に買いに行ったチューブトップのビキニ。

どっちも可愛くて捨てがたい。

「泳げないのに?」

「海では泳がないよ。いくら私だってそこまで無謀じゃない」

そう言ったら、ホルタ ネットとデニムのショートパンツを手にとって私に押し付けた。

「これにしる。膝丈以上水に入るな。いいな?」

「えーっ!?!」

「やっと骨がくっついてきたんだろ?水に入って無理な態勢をとっ

て悪化させたいのか」

「…」

返す言葉が無くて、しぶしぶと水着とショートパンツを受け取った。泳ぐつもりはなかったけど、浮き輪でちやぶちやぶしたかったの。それだけなのっ

「ったく…ビキニなんか着させる訳ないだろ。バカだな」

それ、ビキニを買った慧君に言っして下さい。

「膨れても駄目だ」

いい天気！

空には大きな入道雲が浮かんでいて、水面はキラキラ光っていて…

『海に来たぞ！』って叫んじゃいたい気分。

「気持ちいいね」

「あんまり奥に行くなよ、急に深くなるからな」

3人でお弁当を持って海に来た。慧君はビーチでのんびりとお昼寝中。

ちゃんと言いつけを守って膝までしか水に入っていない。

「アレ、やりたかったなあ」

砂に足をとられて転ばないように、葵と手を繋いで浅瀬を歩いてい

た。

これはコレで楽しいんだけど、やりたかったことが出来ないのはちよっと残念。

「…治ったらやってやるよ」

水の中にいる葵を目がけて、高いところから飛び込むの。私を抱きとめた葵と一緒に水の中に潜るのが楽しいんだよね。

「ホント？…でも、泳げるシーズンが終わっちゃうよ」

「…雪山、とか？」

それを聞いて、フワフワの雪の中に飛び込むのを想像した。葵と雪まみれになって遊ぶの……うん、楽しいかも！

「雪がたくさん降る所に行こうね！スノーボードもしたいな」

「それは駄目」

即答された…ケチ！！

「あ…」

ふいに空が陰ったような気がして空を見上げると、隣も同じように見上げていた「降りそうだな」と葵が呟いたら、ポツリと頬に雨粒が当たった。

「帰るぞ」

手を引く葵の手を引き返した。

「水着だから濡れても平気だよ」

「風邪ひいたらどうすんだよ」

「まだ帰りたくない」

「我儘言っな」

雨粒が大きくなったような気がする。そう思って、もう一度空を見上げたら、ピカッと光った。

「あ…光った」

「帰るぞー！」

うん、雷が鳴ってここにいるのは危険だね。

走ろうとしたら「お前は走るな」と怒られて、葵の小脇に抱えられて慧君が待つビーチに帰った。

車の中に避難した途端、土砂降りに変わってしまった。

「雨、止むかな？」

窓に顔を付けて外を眺めていると、隣で葵も外を眺めていた。

3人の夏休み (3)

花火大会が中止になったらどうしようかと心配したけど、激しく降った雨が嘘のように空は綺麗に晴れていた。

「胸は苦しくないか？」

「大丈夫」

近所の美容室で浴衣を着せてもらった。

昔からあるお店の人は、ママの事を知っていて「あら、真紀ちゃんのこと？」と私が知らなかったママの話を教えてくれた。

「真紀ちゃんは怒るとすごく怖くてガキ大将も頭が上がらなかったのよー」

「ファンが大勢いてね、梨桜ちゃんのパパと結婚したときは皆泣いてたわ」等々。

後で葵にも教えてあげよう。

私と葵が花火大会に出かけようとすると、玄関先で腕を組んで渋い顔をしている慧君。

「梨桜から目を離すなよ？」

「ああ」

慧君も花火大会に行く予定だったけど、急遽同窓会に呼ばれて一緒に行けなくなつてご機嫌斜め。

「変な男に絡まれるなよ」

「…ああ」

「手を掴んでないとフラフラ居なくなるからな。迷子になるぞ」

「…」

「ちゃんと見てろよ!?!」

「分かつてる!同窓会に遅れるぜ?」

慧君、心配しすぎ。

私はそんなに子供じゃないから…

「行つてきます!」

慧君に手を振つて家を出た。

手を繋いで葵と歩いていると、皆が私達を見ている。

ここでも葵は注目的。海でも女の人の注目を浴びていたもんね…

花火が打ちあがる前のお楽しみ。

屋台でお買いもの!

「あ、りんご飴」

大きいよりも、姫リンゴで作ったりんご飴が好き。

「…さつき綿あめ買ったる」

「両方買ったの」

夏祭りの屋台で買ったのは、たこやき、綿あめ、りんご飴。これは必須なんだよ！
それから…

「水ヨーヨーだ！葵、釣って？」

「ガキ…」

何歳になっても楽しいの！！
リクエスト通り、ピンクの水ヨーヨーを釣ってもらった私はご機嫌で葵と歩いていた。

「葵！」

「次はなんだ!？」

「見て！始まったよ!！」

打上花火が上がって、周囲からもワアツと声が聞こえた。

「…凄いね」

慧君から花火が良く見える穴場を聞いて来たんだけど、到着した高台の公園はカップルだらけ…

「ここまで人が多いと穴場じゃなくなってるな」

イチャついていているカップルの間を潜り抜けて、空いているベンチを見つけたけれど座っていいのか迷ってしまった。
…ママの浴衣を汚したくない。

「梨桜」

名前を呼ばれて振り返ろうとすると、葵が私のお腹に手を回した。

「なに？」

体を後ろに引かれて、ストーン、と腰を下ろしたのは葵の膝の上…
吃驚した…

「汚したくないんだろ？」

「うん、葵ありがと」

葵の右足の上に座らせてもらって花火を見ることにした。

「綺麗だね」

「そうだな」

「葵と一緒に見たのは…高校に入る前だったよね」

そう言つと、葵は何かを思い出して笑っていた。

「何で笑うのよ」

「梨桜が迷子になったのを思い出した。慧兄の言う通りだな、梨桜は昔から目を離すとすぐにどこかに行く」

「私が普通で、葵がいい子過ぎたんだよ」

「逆だろ、オレが普通で梨桜が落ち着きのない子供だったんだよ」

悔しい！でも、小学校の時に先生から『梨桜ちゃんはおてんばさん』
つて言われた事がある。

それに反して葵は『葵君は落ち着いてるのね』って…

あれ？葵って昔と今では違うよね

「葵」

「ん？」

「今、葵がやんちゃなのは子供の頃の反動？」

気になって聞いたら、思いつきり嫌な顔をされた。

「落とすぞ」

そう言つて、支えてくれていた手を離そうとした。

「やだ！」

足の上に座るのって結構バランスを取るのが難しいんだから！今だって葵に支えてもらって座ってるのに！！

葵の首にしがみついていると「たこ焼きがつぶれるぞ」と言われて慌てて離れた。

たこ焼きを買ったの忘れてた。

「食べる？」

「ああ」

楊枝にたこ焼きを刺して葵の口元に持って行くと、一口で食べた。

「美味しい？」

「ん」

いただきますーす！

「美味しいね」

屋台のたこ焼きってどうしてこんなに美味しいんだろ。

「おまえはガキみたいだな」

眉を顰めて私を見ていた

「え？」

私の膝の上に乗せていたハンカチを取って口元を拭いてくれた。
あれ、ソースついてた？

「だって、たこ焼きが大きいんだもん」

「一気に食うからだろ」

「一口で食べるのが美味しいんだよ」

「あっそ…梨桜、もう一個」

葵に催促されてたこ焼きをもう一つ食べさせてあげて、私はフフッと笑ってしまった。

「葵だって、ソースついた」

口元を拭ってあげると疑いの目で私を見ている

「ワザとだろ」

「知らないよ」

ワザとじゃないもん

「梨桜のクセに生意気だ」

「葵だって、葵のクセに生意気！」

「花火はどうだった？ラストは豪華だったんだろ？」

次の日の朝、慧君の問いに二人とも答えられなかった。

「どうした？二人とも」

「綺麗だったんじゃないの？…多分」

たこ焼きのソースで言い合って、一番見所だったラストの花火を見逃した。

なんて恥ずかしくて言えない…

肉食 VS 肉食 side: 悠

梨桜ちゃんと、寛貴さんが女豹に喰われる…

遡ること一時間前、梨桜ちゃんが「海老フライ食べたい」ポツリと言った一言で繁華街にやって来た。

彼女の口から『食べたい』という言葉はあまり出てこないから、何よりも優先されてしまう。

「幸せ！」とニコニコの梨桜ちゃん。「梨桜ちゃんて海老が好きなんだな」と聞けば「うん」と頷く姿がやっぱり可愛い。

「この後、どうする？梨桜ちゃんもクラブに行ってみる？」

拓弥さんが聞くと、寛貴さんを見上げる梨桜ちゃん…二人の雰囲気は自然で、もしかして…と思っていたら

「梨桜ちゃん!？」

大きな声がして、女が梨桜ちゃんに抱きついた

「吃驚した…杏子さん？」

抱きつかれたまま、本気で吃驚している梨桜ちゃん…

寛貴さんから一瞬、殺気が感じられたけど、相手が女だと分かって抑えているらしい。

「もう！全然お店に来てくれないんだから！」

梨桜ちゃんに抱きついているのは、これから出勤らしい夜の蝶…
同伴らしいサラリーマンのおっさんは呆然として美少女に抱きつく
夜の蝶を見ていた。

あれから無理矢理連れられた店で、この店のナンバーワンホステス
は美少女にべったりだ。

「梨桜ちゃん、フルーツ食べる？メロンがいい？苺にする？」

男を癒す筈の店で、ナンバーワンは美少女しか見ていない。

「杏子さん…私、お腹いっぱいです」

「そつなの？お金ならいいのよ、涼君につけるから」

勝手に五代目につけられるこの人って…何者

「拓弥さん、この人って？」

「四代目の副総長の彼女」

へえ、だから強気なんだ。

さっきから思うのは、この人は梨桜ちゃんが大好きなんだって事。
…客も放置されていて気の毒だ。

「梨桜ちゃん、写真撮ろう！」

突然始まった撮影会に寛貴さんの顔がひきつってきた。

「あら、藤島、私のすることに文句あるの?」

「その写真をどうするつもりですか」

杏子さんという女性の迫力に梨桜ちゃんも引き気味で、寛貴さんの方に逃げていく気がする。

「決まってるでしょ、見せびらかすのよ」

「誰に?」

「代々の幹部よ」

なんだそれ…オレと拓弥さんが呆気にとられていると「皆、梨桜ちゃんに会いたがってるのよ。でも、初代が許してくれないのよね」とブツブツ言っていた。

「梨桜は見世物じゃない」

寛貴さんが憮然として言うと、杏子さんは「呆れた」と目を見開いていた。

「藤島、こんなに可愛い子を隠しておくなんて何考えてるのよ!? 私なら見せびらかすわよ! 周囲に見せつけてやるわ」

この人の思考回路って…オレが呆れていると、隣で「思い出した」と拓弥さんが引き攣った笑いを浮かべていた。

「拓弥さん、なに?」

「杏子さんて、可愛いのが大好きなんだよ。男も女も関係無く…」
ギョツとして梨桜ちゃんを見ると、杏子さんに「梨桜ちゃん大好き
!」と抱きつかれそうになっていた。

「いい加減にしろ!」

寛貴さんが、抱きつかれる寸前で梨桜ちゃんを自分の方に引き寄せ
て杏子さんの攻撃を防いでいた。

「ちょっと、邪魔すんじゃないわよ!生意気よ藤島!」

「うるせえ!」

睨みあっていて、引く気配はない。梨桜ちゃんは困り果てた顔をし
て携帯を取り出してどこかに電話をかけた。

「…葵、来てくれる?」

「梨桜ちゃん、それは止めた方がいいぞ」

拓弥さんが言うつと、「どうして?」と聞き返された。

「どうしてじゃねーよ、これ以上増やすな!三つ巴にしてどーすん
だよ!」

拓弥さんの意見に賛成だ。

肉食の三つ巴なんて…想像するのも嫌だ。

.

あと五分で午後の授業が始まる。

オレは、午前の授業をサボって午後から登校。

教室に行く前に拓弥さんに用事があったって二年の教室に来ていた。

『全校生徒の皆さん、学校祭実行委員会からのお知らせです』

突然、教室にあるテレビの電源が入り、放送委員の顔が画面が映し出された。

『今回、学校祭のイベントとして同じ地域にある乳児院にハロウィンにちなんだプレゼントをしたいと思います。そこで、皆さんへメッセージです』

「そんな話あったか？」

寛貴さんが拓弥さんに聞いたけれど、首を横に振っていた。オレもそんな話は知らない。

『『全校生徒の皆さんこんにちわ』』

画面に映し出されたのは…

何してんだよ！？この二人！！

『1年2組の笠原麗香です』
『東堂梨桜です』

「梨桜ちゃん!？」

なんで放送室にいるんだよ。

『学校祭イベントに賛同して皆さんにお願いがあります』

生徒達はテレビの画面を食い入るように見ている。

梨桜ちゃん、テレビ映りもいいんだな…

『乳児院に入所している子供達にお菓子のプレゼントをしたいと考えています。そこで、賛同して下さる方はお菓子の寄付をお願いします』

梨桜ちゃんに代わって笠原が話していると、教室内がざわついた。

「乳児院ね…家庭の事情で施設に預けられてる子供達だよな」

拓弥さんの言葉に寛貴さんが頷いている。

実行委員会から協力してくれって言われたんだろっな…梨桜ちゃんなら率先してやりそっだ。

寛貴さんも同じことを考えているのか、柔らかい表情をしている。

「お菓子ね…実行委員から変なことさせられなきゃいいけどな」

「変なことって?」

「コスプレとか?」

一気に不機嫌な顔に変わった寛貴さん。
梨桜ちゃんが魔女のコスプレしても可愛くなるんだろっな…

『…というわけで、実行委員会と協力してくれた笠原さんと東堂さんからでした。最後に二人からのメッセージです』

なんだ？と思っていると、二人が顔を見合わせて小さな声で『せーのっ』と言っていた。

おい、何を言うんだ？

寛貴さんと拓弥さんは怪訝な顔をして画面を見ていた。

『お菓子をくれなきゃ、イタズラしちゃうぞ！』

画面に向かってスッゲー可愛い笑顔…

「…」

「……うおーっ！」「」

隣の教室から雄叫びが上がっている。

「姫、最高！！」

「姫力ワイー！！」

梨桜ちゃん！！！！

野郎共を興奮させてどーすんだよ！

「梨桜ちゃんおもしれー！！あの子といると飽きないな」

拓弥さんは大爆笑だけど、寛貴さんが…マジでヤバイぞ！

「あの、バカ…」

「寛貴、おまえさ…もう少し自覚させるよ」

拓弥さんが笑い過ぎて目尻に浮かんでいる涙を拭いながら言った。

梨桜ちゃん、オレもそう思う。

美少女に可愛く『イタズラしちゃうぞ』なんて言われたら健全な男子高校生はイケナイ妄想で頭がいっぱいになっちゃうんだよ。

キミは超絶美少女だって言うことを自覚して、男がどういうものか学んだ方がいいよ…

寛貴さんが携帯を手にして立ち上がった。

「行くのか？」

「ああ」

寛貴さんは電話をかけながら教室を出て行った。背中が怒ってるよ…

「あゝあ、お仕置きだな」

「…だよな」

梨桜ちゃん、今回ばかりは仕方がないよ。頼まれたのは分かるけど、最後のアレはダメだろ。

大人しく寛貴さんのお仕置きを受けるしかないな…

「あ…寛貴に手加減してやれって言うの忘れた」

「拓弥さん、無駄だと思う」

「…仕方ねえな、今日は梨桜ちゃんが悪い」

後から笠原に聞いた話だけど、寛貴さんは嫌がる梨桜ちゃんを担ぎ上げて学校を後にしたらしい。

次の日「怒られた？」と聞くと力なく頷いていたらしい。

Halloween team:青龍 side:トジ

「Trick or treat」

すっげー可愛い魔女が小首を傾げている。

「…オレが甘いもん持つてるわけねーだろ」

冷たい一言に頬を膨らませている可愛い魔女

「じゃあ、悪戯する！」

「やれるもんなら、やれよ」

ニヤリと笑い、羽交い絞めにして抱き込んでいる葵さん…どっちが悪戯してんですか。梨桜さんが苦しそうだから止めてあげて下さい。

「梨桜ちゃん、ハロウィンが何を由来しているか分かってる？」

愁さんの問い掛けに首を捻って考えている。

「梨桜ちゃん、ハロウィンはね10月31日の夜に死者の霊が家族を訪ねたり、精霊や魔女が出てくると信じられていたんだよ」

そこまで聞いて梨桜さんの顔が引き攣った。

梨桜さんは、ホラーが大嫌い。怖くて仕方がないらしい。だから“死者の霊…”なんて単語はタブーだ。

「って事で、新作を借りてきたんだよね。梨桜ちゃんも一緒に見る？」

手にしていたのはホラー映画。大して怖くないと思うんだけど、梨桜さんはきつと泣き出すくらいに怖い筈だ。

愁さん、オレには精霊や魔女よりもあなたが怖いです。

「やだ！見ない！！」

そんなに怖いなら、隣の総長室にいればいいのに、一人だと怖いからそれもできないらしい。

映画が始まると、梨桜さんは葵さんにぎゅーっと抱きついて、自分の耳を葵さんに塞がせている。

すっげー羨ましい。

でも、梨桜さんにしがみつかれたら、オレ動悸が激しくなって呼吸困難で死ぬかもしれない。

お見舞い side・悠(前書き)

秋桜本編「足りないものは…」(6)・(7)「のサイドストーリー
です。

お見舞い side:悠

「寛貴さん、熱下がったんすか？」

「ああ」

珍しく風邪を引いた寛貴さんだったけど寝たら熱が下がったらしく見事に復活していた。

「オレからの見舞いはどうした？」

「帰った」

ニヤニヤしている拓弥さん

「なんだよ」

「別に」

梨桜ちゃんにお見舞されたい…
その時、リビングの扉が開いた

「あら、来てたの」

「ども」

「お邪魔してます」

寛貴さんのお袋さんが帰ってきた。

いつも夜中に帰ってくるらしいお袋さんを見るのは久しぶりだった。

「あーお腹すいたわ！今日はお夕飯があるの？」

キャリアウーマンのお袋さんはテーブルに乗せられていた料理を見て「美味しそうね」と笑みを浮かべていた。

「それはオレの、お袋のは無い」

「…政美さんに作ってもらったの？」

「違う」

「梨桜ちゃんだろ？今日のメニューはなんだ？」

拓弥さんが食器にかけられていたラップを捲っていると、おばさんが興奮しだした。

「ちょっと、どういこと！？」

「…喚くなよ」

どうしてお袋さんは熱いのに一人息子の寛貴さんは冷めているんだ…謎だ。

「あんだ彼女できたの！？」

「…」

無言の肯定。

それを読み取ったお袋さんは頬に両手を当てて喜んでいた。

「なんで帰したのよ！会いたかった！どっとう子なの？可愛い？」
興味津々のお袋さんを無視している寛貴さん。梨桜ちゃんは美少女
なんだから自慢すればいいのに。

「すっげー美少女ですよ。優しくて料理が上手いんです」

オレが代わりに応えると、お袋さんはニヤニヤと笑っていた。

「へえ、あなたにはもったいないわね。今度紹介しなさい！」

「会ってどうすんだよ」

「お喋り」

「やめてくれ」

お袋さんが冷蔵庫を開けて「え？」固まっていた。

「寛貴、あなたの彼女って…おもしろいわね」

「は？」

冷蔵庫から皿を取り出してテーブルに置きラップを外すと…

「おまえ、宮野と同じ扱いになってんじゃない？」

うさぎに切られたリンゴがたくさんあった。

「宮野って?」

「東青の宮野葵、おばさんも聞いたことあるでしょ?」

「あの、模試でいつも張り合ってる宮野君?なんであんたの彼女が宮野君とあんたを同じ扱いにするのよ」

「オレ聞いた!初代が梨桜ちゃん達が小さいときにウサリソゴ作ってくれて大好きだった」

「ちょっと、分かるように話なさい!」

「宮野葵と梨桜ちゃんは双子なんだ」

「なんか…凄い子ね。宮野君て青龍のトップでしょ?」

「そう、梨桜ちゃんは朱雀と青龍のお姫様」

「姫とかって、羨ましいわ」

「妄想すんな」

オレ達が呑気に話している時に…まさか双子が大喧嘩をしているなんて思わなかったんだ。

pierce side:悠

「なんでおまえらまでいるんだよ…」

もともと不機嫌なのに、オレ達の顔を見て眉を吊り上げる五代目。優しい主治医の仮面がバラバラと剥がれ落ちているが、患者が目の前に居ない今はどうでもいいらしい。

「女豹に梨桜ちゃんが喰われないか心配だったから」

オレが言うと、フンと鼻で笑いグラスを煽る色男。

「ったく…同伴しろって煩いから時間をあければ梨桜ちゃんだけでいいって…女子高生と同伴するホステスなんて見たことないぞ」

オレも初耳だ。

「いらねー。コジ、作れ」

キャバクラに来て小嶋に水割りを作らせているバカな宮野：そんなに嫌なら来なければいいのにシスコンは双子の姉が心配で仏頂面でソファにふんぞり返っている。

「きゃあ！拓弥くんおもしろーい！」

目一杯この環境を楽しんでいる拓弥さん。

その隣で煙草を吸いながら一生懸命話しかけてくるキャバ嬢を無視している寛貴さん。

なんなんだよ、この席。
全員がバラバラ…

「そう、良かったね。……早く戻っておいで、待ってるから。……
うん、気を付けて」

三浦が携帯で喋っている。
それをギロリと睨んでいる宮野と寛貴さん。

「愁、梨桜ちゃんか？」

携帯をしまいながら兄貴の問いに頷いてグラスを傾けていた。

「杏子さんの買い物が終わったからこれからこっちに向かっちゃって」

「…なんで愁に連絡するんだよ」

宮野が腹立たしそうに言えばニヤリと笑う三浦。

「おまえだと口煩いからだろ」

「おかえり」

三浦が微笑むと「ただいま！」と笑顔が返ってくる。
ホントにキミは三浦に手懐けられて…

「買い物は出来たのか？」

5代目が聞くと「涼先生、見て見て！」と携帯の写メを見せている。

「杏子さんが可愛いピアスがたくさん売っているお店に連れて行ってくれたの」

今日は友達のお誕生日プレゼントを買いに行くって言って出かけていた。

「可愛いのが一杯あったから私もピアスがしたくなっちゃった。」

その発言に反応しているのが約2名…

ピアスならオレも開けたから分かるけど、そんなに殺気立つモノじゃないと思うんだけど…

「涼先生、ピアス開けて下さいってお願いしてもいいですか？」

「梨桜」

宮野が低い声で呼ぶと、チラリと奴を見て視線を5代目に戻していた。

5代目は宮野と寛貴さんを見て苦笑いを浮かべながら梨桜ちゃんの耳に触れた。

「ピアスが似合う耳だと思っけど…開けるとしたら冬だな。開ける方法は2つある」

「え？ピアッサーでパチン！って開けるんじゃないんですか？」

オレは彼女に勧めらんねーけど安全ピンで開けたぞ。

「ウチの病院は2つ。ピアスガンかニードル。どっちがいい？」

「ニードルってなんですか？」

フルーツに刺さっていたピッグを抜き取り梨桜ちゃんの手に乗せると、それを耳に当ててチクリと刺していた。

ビクッと肩を竦めている梨桜ちゃん。

それ位でビビってたなら貫通させらんねーぞ？

「針だよ。先端が尖っているから傷の治りは早いけど、痛いのはどつちも同じ。梨桜ちゃんが大嫌いな点滴の針なんかよりもずっと太いからね…」

完全に引き攣っている梨桜ちゃんにトドメの一言。

怖がっている梨桜ちゃんに嬉々として話している5代目って…

「ピアスができるなら、毎回『点滴嫌い』なんて我儘は言わないよな？…オレとしてはピアスで点滴嫌いが治ればいいけど？」

フルフルと首を横に振っている。

「ちょっと、涼君！怖がつてるじゃない、止めなさい」

どさくさに紛れて梨桜ちゃんを抱き寄せている女豹。

それを見て眉を吊り上げた宮野がさかさ奪い返していた。

「梨桜ちゃん、まだピアスしたい？」

首を横に振って宮野にしがみついている。

「まあ…葵と藤島の許可が取れたらおいで」

脅すだけ脅して、そりゃねーだろ。

それに、許可なんか取れる訳がない。

この2人の目を見ればわかる。全身で『体に傷つけるな!』そう言っている…

ピアスくらいしたいと思うならさせてやれよ!

そう思うオレはきつとマトモだと思つ。

寂しい理由 side…「ジ」(前書き)

「おかえり」のサイドストーリーです。

寂しい理由 side:「ジ

愁さんは、この状態を『目の毒』って言うっていたけど…

確かにこれは……でも、オレはずっと見ていたいかもしれない。

幹部室のソファでオレは梨桜さんの手伝いで胡桃の皮を剥いていて、梨桜さんは編み物をしながらオレとおしゃべりをしてくれている。

愁さんは梨桜さんが座っている向かいのソファに横になって昼寝。

葵さんといえば……梨桜さんの膝枕で同じく昼寝。

長い脚をソファの肘掛けに乗せて綺麗な寝顔を惜しげもなく晒している。

72

「よお」

突然開いた扉に梨桜さんがニッコリと微笑んだ。

「「!?!?」」

部屋に入るなり固まった大橋と海堂。

この光景に驚いたか？

「寛貴！」

嬉しそうな梨桜さんの声。「どうしたの?」と聞かれて「コイツに呼ばれた」と愁さんを指して言った。

藤島ってこの状況でも動じないのかよ?

普通、嫌だろ…自分の彼女が自分以外に膝枕してるなんて。

梨桜さんと藤島を見ていたら、オレは見てしまった。

一瞬だけど、葵さんの眉が不機嫌そうに寄せられたのを……

寝たふりですか?葵さん?

「愁君?」

梨桜さんが言うのと今まで固まっていた大橋が我に返ったように愁さんを見た。

「三浦、土産!」

大きな声に愁さんは眉を顰めて目を開けた。

「おまえは相変わらずうつるせえな…そこにある。ったく土産、土産
つて…」

『土産!』そう強請ったのは海堂だと聞いていた。

葵さんが買って来るとは思えないから愁さんが買って来たんだよな…

「葵、起きて」

梨桜さんに起こされると、ジロリと藤島達を一睨みし、また目を閉じて寝返りを打った。

『眠いんじゃないなくて、起きたくない』なんですね…駄々っ子みてえ
「…」

起きない葵さんに梨桜さんは髪の毛を撫でて優しく話しかけていた。

「眠いなら隣の部屋に行こ？」

こんな風に起こされたらオレなら絶対に起きる！そう思っていると
葵さんがムクリと起き上り髪をかき上げて梨桜さんの顔をジッと見
ていた。

「…こついう事だったのか」

「え？」

葵さんは呟くと首を傾げている梨桜さんの頬に手を当てていた。

「？」

「やっと分かった」

言われている意味が分からずにキョトンとしている梨桜さんに一人
で納得している葵さん。

「葵、何が分かったの？」

梨桜さんの顔をジッと見て、いつもの“ぎゅっ”っていうアレをや
った。

啞然として目が点になっている大橋と海堂。さすがに藤島も驚いているようだ。

彼氏の前でいいんですか??と思ったが梨桜さんは大人しく葵さんの腕の中にいて、不思議そうに顔を見上げていた。

「前に梨桜が寂しいって言い出して離れなかったことがあっただろ」

葵さんはまるで梨桜さんと二人きりのように彼女だけを見て話しかけている。

「?…結構前の事だよね?」

梨桜さんは「中学の時だよ」と言いながら首を傾げている。葵さんも葵さんだけど、梨桜さんも相当だぞ? 弟とはいえ、彼氏の前で!!

「あの時、理由は分からないけどヤダって言って泣きそうだったよな…何で梨桜がそう感じたのか分かった」

「…えっ!? 教えて!」

藤島を睨みながらボソリと「絶対に教えねー」と言い腕に抱いていた梨桜さんを担ぎ上げた。

「葵!??」

「お前らには見せねー」

「おい、葵？」

焦った愁さんの制止も聞かずに部屋を出て行ってしまった。

ボタンと閉められた扉を見ながら大橋が呆気にとられていた。

「何なんだアイツ……」

藤島がボソリと「シスコン……」と呟いていた。

シスコンは知ってるけど……藤島には意味が分かったのか？

ジंकウス? side…悠(前書き)

秋桜本編「昨日よりも…」 (5) 「サイドストーリー」です。

ジnkクス？ side：悠

ウチの生徒なら一度は目にしてみたい光景

場所は屋上。

壁に背を預け片膝を立てて座っている寛貴さん。

その立てた膝に手を当てて、楽しそうに何やら話しかけている梨桜ちゃん。

足の間にすっぽり収まった梨桜ちゃんは急に真顔になって寛貴さんを見つめると目元にチュツとキスをした。

見ているこっちが赤くなる…

誰にも見られていないと思っっているんだろう。幸せな子だよ。ったく…

屋上にいる二人を見るとラッキー。

イチャついているのを目撃できると超ラッキーだと言われている恋愛ジnkクス。

こんなのイチャついているだけじゃねーかっ！オレなんかいつも見せられてる！…！

くっだらねー！！！！

オレなんかなあ、とんでもなくすっげーもん見ちまったんだぞ！

結構シヨックだった…

場所は藤島邸、ちなみに豪邸。

梨桜ちゃんに無理やり女装させられてメイクをされたオレは学校から逃げてきた。

絶対にオレだつて言わないでくれ！それを言いたくて梨桜ちゃんを捜して、この家に来た。

いつもの裏口から入ると玄関の鍵が開いていた。

珍しい…

そう思いながら家上がり、一階のリビングの扉を開けた。

ソファの上に無造作に置かれていた梨桜ちゃんの荷物。

ここに居ないって事は寛貴さんの部屋か…

梨桜ちゃんにやられた仕返しに驚かせてやろう。そう思って足音を立てないように寛貴さんの部屋の前まで行った。

扉に手を掛けようとして聞こえてきた声に手が止まった。

「もっ…やだあ！」

イヤイヤと首を横に振る梨桜ちゃんの目から涙が零れ落ちていて、それを唇で拭っている寛貴さん。

扉の隙間から中は見えるが、角度で良く分からない。

どうやら彼女を自分の膝に乗せているらしい。

「梨桜、どうして欲しい？」

見るからに寛貴さんのだと分かるシャツを着ていて、白い肌が見え隠れしている。

すっげ…綺麗。

「んっ…やあ…ひ、ろ…き」

寛貴さんに向かって腕を伸ばす梨桜ちゃんを見て口角を上げているように見える。

「梨桜、言葉で言えよ」

「ふ…え…ごめ、んな…さい」

ポロポロと涙を流す梨桜ちゃんの泣き顔とは対照的な声色の寛貴さん。

「違うだろ？」

「……て」

「聞こえない」

「やあ」

「!!!」

口を塞がれて体をズルズルと引きずられた。

「おまえなあ、見つかったら殺されるぞ!？」

オレを寛貴さんの家から連れ出したのは拓弥さんだった。

「ワザとじゃない! 偶々見えちゃったんだっ」

「結果的には覗きと同じだろーが」

「うっ」

そう言われると何も言えない。

「なんで拓弥さんはここにいるんだよ!」

「あ? オレは梨桜ちゃんに聞きたいことがあったんだよ。…まさかお仕置き中だとは思わなかった」

お仕置き?

「あれっってお仕置きなのか」

オレが言つと拓弥さんは呆れた顔をしていた

「…あれがお仕置きじゃなかったらなんなんだよ。まあ、あんな恰好をしていた梨桜ちゃんも悪いけどな。…おまえはいなかったんだよな」

「…」

正確には、居た。

女装した姿を見られたくなくて逃げただけど…梨桜ちゃんはなんでお仕置き？

「でもあのセーラー服もそるよな。露出高くてオレ好み」

ああ、ヤンキー仕様のセーラー服な…確かに

「拓弥さんが聞きたい事って？」

「おまえも梨桜ちゃんと同じクラスなら知ってるよな。生徒会室から逃げたあの美少女は誰だ？」

背筋にゾクリと震えが走った。

その眼は…気になる女を追いかける目だよな？

「…そんな事知って、どうすんだよ」

止める、止めてくれよ!？

「分かんねえけど、気になる」

…オレは追いかけれたくねえぞ…!!

.

狭い世の中？ side：安達

……世の中ってわかんねーもんだな。

- 宮野 慧 -

頭脳明晰、容姿端麗。

性格は超オレ様。

そんなメチャクチャな男でも、筋が通っていて真っ直ぐ。

口は悪いけど優しいところもあつて憧れている生徒も多い。

とにかく目立つ存在。

憧れていた生徒会に入れて、半年たった今も宮野先輩に声をかけられると緊張する。

「慧！どこいくんだよ！」

生徒会顧問から呼ばれて職員室に行っていた先輩は、生徒会室に戻って来ると慌ただしく帰り支度を始めた。

「姉貴から呼び出し。ワリイ、荷物持ってきてくれるか？」

生徒会に入ったばかりのオレは憧れの先輩から頼まれて慌てて頷いた。

宮野先輩が行ってしまった後の生徒会室は緩い雰囲気になり、生徒会の仕事に手を付けずにしゃべっていた。

「慧の姉貴見たことあるか？」

「ある！スッゲー美人！」

「マジ？」

美形一族か…羨ましい。

男でも綺麗な顔をしている先輩のお姉さんなら凄く綺麗なんだろうな…。

「おまえも運が良ければ見られるかもよ？」

スッゲー美人のお姉さんに会えることを期待してきた先輩のウチ。

玄関のインターホンを押すと、「開いてる！」と先輩の声がした。

「おじゃまします…！」

恐る恐る扉を開くと、パタパタと小さな足音がした。

「コラー！」

「きゃー！」

きゃー？

子供がパタパタと走ってきた。子供？

「捕まえる！」

先輩の声がして、走り回るチビツ子を慌てて抱き上げた。

「やあっ！」

ちっせー！

腕に抱き上げたその子は…目をくりくりさせてオレを見ていた。

「けーたんのおともだち？」

オレの目をジツと見ているチビツ子を見て驚いた。この子、人形みてえ…

「けーたんのおともだち？」

答えないオレの顔を見ながら小さな手でオレの顔をペタペタと触っていた。

「安達、悪いな。助かった」

先輩は腕まくりをしてズボンの裾をまくって、腕には小さい子供を抱いていた。

オレが抱いている子供と同じくらいのこと…

「けーたん！」

オレの腕にいるチビツ子は先輩に向かって両腕を伸ばしていた。

「このおてんば娘！」

最初に抱いていた子供を片腕で抱き、オレが抱いている子供も、もう片方の腕に抱いた。

その仕草は手馴れていて、子供たちも当たり前のように先輩に抱っこされていた。

「あーたん！」

「りー」

「入れよ」

腕に抱かれたままじゃれている子供達を抱いたまま先輩は家の中に入って行った。

通されたリビングで先輩が子供達をソファの上を下ろした。

「先輩、この子達は…」

「姉貴の子。双子だぞ」

『スツゲー美人』なお姉さんの子供は人形みたいに可愛らしい。この家の遺伝子はどうなってるんだよ…

双子同士顔を見合わせてキヤツキヤと笑っている。

何がそんなに楽しいんだか…

…

今思えば、アレが双子との初対面だったんだよな。

まさか…あの時抱き上げたチビツ子がオレの教え子になるなんて。

「藤島、いい事教えてやるうか」

生徒会室でコイツと二人。退屈凌ぎに声をかけたが…

「…」

おまえなあ、オレは仮にも教師だぞ。

しかもチームの大先輩だぞ？その面倒そうな顔はなんだよ…

ム力つくから意地悪してやる。

「東堂つて実は甘えただろ」

「…」

見てりゃ分かんた。って言いてえ顔だな？

ふん、苛めてやる。

「両腕を伸ばして“抱っこ”を強請る癖があるだろ？」

冷めた表情が一気に不機嫌な顔に変わった。
藤島つてもっと冷めた奴だと思つてたけど、東堂が絡むと熱くなるんだな。

まあ、それはアイツも同じだけだな。今度『あーたん』つて呼んだらどういふ顔すんだろつか？見てみてーな。

「あれ、可愛いよな。抱っこしてやるとほっぺたスリスリすんのな」

おゝ…マジで睨んでる。

本気になれる対象ができたってーのはいいことだと思つぞ？

「何で知つてんだよ。つて顔だな？」

つっ！か東堂、高校生にもなつてその癖が抜けねえんだな。

おまえは3歳児のままかよ…

「どこで見たんですか？」

先輩に甘えて抱っこを強請るのを見た時に聞いた。つて事は教えてやらねえ。

「…どこで見たんだつて聞いてんだけど」

「…お、落ち着け、藤島」

ちよつと…その眼はオレでも怖いかもしれない。

「先生！こんなところにいた！」

タイミング良く現れたのは渦中の“甘えたちゃん”
人形みたいに可愛らしかったチビツ子は美少女としてオレの前に立
っている。

「おー、どうした？」

「先生、実行委員が探してましたよ」

助かった。と心の中でホッと息をついた。

「分かった。じゃーな、藤島」

席を立つと、オレの背後で「梨桜、来い」と藤島が言っていた。

…東堂、悪いな。

後の事は頼むぞ！

Snow White (1) Side:悠

『海堂、梨桜に教わっておいで赤点取るなんてふざけたことするなよ』とか

『平均点+10点だ』とか…

散々、二人の総長に脅された期末試験。

オレ的には、次期生徒会長は“東堂梨桜”がいいと思う。

…そんな結果だった。

補講、補講の毎日に泣きたくなってくる…

「ただいま…」

豪邸のリビングに繋がる扉を開けると

「よお！補講は終わったか？」

拓弥さんのあつけらかなとした言葉の背後で、滅多に見れない光景が展開されていた。

「あら、美味しい！」

「…オレのだ、食うなよ」

藤島邸で寛貴さんのお袋さんと家政婦と食事をしているのってなんだか変な感じだ。

「女子高生でこの味が出せるのって凄いですね」

昆布巻きを食べて家政婦の政美さんが感心している。

広いダイニングテーブルに並んでいる料理を見ると、お袋さんと政美さんが食べているおかずと、寛貴さんと拓弥さんが食べているおかずが違う。

…ってことは、梨桜ちゃんが作っていったんだな。オレも早く食べたい。

「彼女がお料理上手っていいですね。寛貴さんは幸せ者だわ」

「寛貴、いつになったら会わせてくれるのよ？…あら、コレも美味しいじゃない！！」

「だから…お袋、食うなよ！」

相変わらず、梨桜ちゃんの事になると心が狭い。

「梨桜ちゃんのお袋さん好評だったよ」

次の日、青龍のチームハウスに行くとテーブルの上に包みがあった。食い物か？

「ありがとう」

「梨桜ちゃんの料理って誰かに習ったの？」

拓弥さんが聞いている脇で宮野が包みを開くと、中から重箱が出てきた。

「和食はタカちゃんのお祖母ちゃんに教わったの。昨日の昆布巻きも矢野家の味付けだよ」

開ける。

宮野、早く重箱の蓋を開ける！！

念を込めて宮野の手元を見てみると、すんなりと蓋が開かれた。

「矢野？」

いなり寿司とおにぎりと…煮物に鳥の照り焼き？卵焼きとサラダと…たくさんのおかずが彩りよく詰められたいた。すっげ…うまそう！！

梨桜ちゃん、サイコー！！

「うん。タカちゃんのトコにお泊まりしたとき…」お、お泊まりい！？」

拓弥さんのデカい声に、弁当から一気に引き戻された。

ヤローんちにお泊まり！？

ギョツとしたけれど、宮野が平然とおにぎりに手を伸ばしているってことは、安全だったのか？

「うん。円香ちゃんと一緒に行ったの」

チラリと寛貴さんを見ると、こっちも平然としておにぎりに手を伸ばしていた。

「タカちゃんの伯父さんが経営してるプチホテルなの。お泊りに行った時にお祖母ちゃんのお手伝いしたの。また行きたいな」

なんだ…焦った。

「今は雪しかないだろ」

「それはそれでいいんじゃない。葵、夏休みの約束覚えてる？」

約束？

梨桜ちゃんを見ると、宮野の顔を覗き込んで聞いていた。

「…一応」

ムツと眉根を寄せると、ヤツの腕を掴んで揺さぶっていた。

「一応じゃダメ！…そーだ！丁度タカちゃんからハガキが来てたんだよね」

バックからハガキを取り出してピラピラと宮野の前で振っていた。

「同窓会！北海道に行っちゃおうかな」

北海道！？

この前は置いて行かれたからな、今度こそついて行くぞ！

「オレも行ってー!」

「オレも行きたいです!」

オレと小嶋の叫びに梨桜ちゃんはニッコリと笑った。

「じゃあ、皆で行っちゃおうか!」

「行く!」

顰めっ面の宮野と呆れ顔の寛貴さんに梨桜ちゃんはフフツと笑っている。

「葵と寛貴はお留守番?」

宮野がハガキを奪い取り文面を見て一言。

「この同窓会、オヤジのところから帰る日だぞ?」

「うそ!」

「よく見るよ」

身を乗り出して、宮野が持っているハガキを見て泣きそうな顔になっていた。

「ホントだ…どうしよう?」

「フライト変更して国内線に乗り継ぐしかないだろ。……仕方ねえ

な
」

宮野が呟くと、ふわりと花が咲くような笑顔。
やっぱり、美少女だな。うん。

Snow White (2) side:悠

イギリスから帰国して飛行機を乗り継いで来る梨桜ちゃんと待ち合わせ。

梨桜ちゃんとの初旅行はドキドキする。

「寒いな」

文句を言う拓弥さんに「だったら留守番してりゃいいじゃん」と言うときロリと睨まれた。

結局、いつものメンバーで北海道にやって来た。

梨桜ちゃん + 北海道の美味いモノ は超魅力的だ。

「来たな、ヤンキー君達」

腕組みをして出迎える姉御：じゃない、梨桜ちゃんの親友。

「それ、嫌だな。拓弥って呼んでよ、円香ちゃん」

いつもの、女の子用に笑みを見せているけど、軽くとあしらわれていた。

姉御も梨桜ちゃんとは違う意味で手強そうだ。

「双子は？」

デッカイ男、梨桜ちゃんの友達のタカちゃんが辺りを見回している。

「ロンドンから成田経由で向かってる」

寛貴さんが答えると姉御が頷いていた。

年末年始に親父さんが帰国できないから、双子が出向いて行った。

親子水入らずで過ごすのは大切な事だけど、会えなくて寂しかった。

「そういえばパパさんのところに行くって言ってたわね」

宮野はずっと一緒なんだよな。

前に一緒にいて窮屈になることが無いのか聞いたら、即答で『無い』
って言われたよな…

オレ、妹と何時間一緒にいて苦痛を感じないだろう。

「ねえ、藤島君」

姉御が話しかけていた。

寛貴さんに媚びずに堂々と話しかけてくる女って珍しい。

さすが梨桜ちゃんの親友。外見だけで人を判断しない人だ。

「なんだ？」

「分かっているとと思うけど、今日は尚人もいるからね？由利は多分来ないと思うけど…」

「ああ…」

「もしも由利が来たら…」

普通は来れないだろ。

宮野と三浦の前で恥をかいて、地元チームから都合の良い女として利用されていると聞いた。

「こつちから行動を起こすつもりはない。でも、梨桜に何かしたら保証はできないな」

「…言うだけ無駄だって言っただろ？この面子が東堂の周りにはだけでアイツは悔しくて地団駄踏むだろうけど、さすがに同窓会には来れないだろ」

タカちゃんが笑うと姉御が眉根を寄せた。

「梨桜を守ってよね？絶対、ぜったいに守ってよ!？」

「言われなくてもそうしてる」

キーツと悔しそうに唸っている姉御。

あんたが一番危険かも…？

「そろそろ着くかな」

今夜宿泊する予定のホテルのラウンジで双子を待っていると姉御がソワソワし出した。

オレも入口のエレベーターが開く度に梨桜ちゃんかどうか確かめずにいられなかった。

そんな事をして十数分後、やっと待ち焦がれた人が帰ってきた。

「梨桜！」

姉御が手を振りながら呼ぶと、気がついた梨桜ちゃんはピョンピョン飛び跳ねて手を振り返していた。

「おかえり！」

抱き合つて再会を喜んでいる梨桜ちゃんと姉御。

「ただいまー！」

彼氏を差し置いてラブラブだな…寛貴さんとタカちゃんが呆れて見ている。

「梨桜、オレ限界超えた…」

「大丈夫？部屋で休んでる？」

チエックインを終えた宮野が手で顔を覆い梨桜ちゃんに寄りかかると、心配そうに宮野の頬に手を当てて顔を覗きこんでいた。

「そうする。…遅くなるなよ？」

宮野は梨桜ちゃんの頭に手を置いて言うとエレベーターホールへ向かって歩いて行った。

おーっ！？小姑一号が離脱した！

「梨桜、疲れてない？」

姉御が聞くとニッコリ笑っていた。

「まだ大丈夫」

「体力ないんだから無理しないでよ？」

本当にラブラブだな…百合みてー

「うん。ありがと円香ちゃん」

姉御から少し離れた梨桜ちゃんは、クルリと振り返った。

「ただいま」

寛貴さんを見上げてニコニコと笑いながら、ピトっとくっついていった。

…相変わらずだな。

「親父さんは元気だったか？」

梨桜ちゃんに話しかける寛貴さんの目が凄く優しい。

ふわりと微笑んでいる梨桜ちゃんは凄く嬉しそうで、寛貴さんが大好きなんだって伝わってくる。

「うん！近くの公園を毎日お散歩したの、寒いけど楽しかった」

梨桜ちゃんと家族になったら楽しそうだな。

.

彼氏、彼女、友達同伴オツケーの同窓会に少しだけ緊張しながら会場のドアを開けた。

「久しぶり！今日は皆で押し掛けちゃった！」

「東堂！？」

「梨桜！！」

会場の中に進むと、男女共に「東堂さん」「りおー！」と皆が驚いて声をかけていた。

人気者だったんだな…

そして、彼女の後ろにいるオレ達を見て様々な反応を見せる元クラスメイト達。

拓弥さんが梨桜ちゃんの同級生に「よろしくー」と軽く声をかけている。

「東堂さん、紹介してよ」

「えっと、同じ学校の藤島君、大橋君、海堂君。弟と同じ学校で友達の小浦君と、小嶋君。です」

女子達の目が、異様にキラキラしているような気がする。

姉御はそれを見て苦笑いを浮かべていた。

「二人とも一年生なんだね！」

こういう場所は拓弥さんと三浦に任せておけばいい。
そう思っていたんだけど、予想外にオレと小嶋がすげー食いつかれてる。

「二人ともカワイーね」

女に可愛いって言われても嬉しくないぞ。
そう思っているのに

「そう思うでしょー？」

梨桜ちゃんまで一緒になってオレ達を可愛いと言い出した。

「梨桜の周りにはイケメンばかりだね」

「梨桜、いいなー！」

羨ましがる友人に、拳を握りしめて力説していた。

「女子生徒が10人しかいないんだよ！？寂しすぎるんだから！」

「逆ハー？うらやましー！」

逆ハー…確かにウチの学校の現状はその通りだな。女っただけで重宝がられていらる。

でも、本当の事を彼女達が知ったらどう思うのか…

梨桜ちゃんは、姫扱いされてるんだぞ！！

本人は嫌がってるけどな…

しかし、女ってスゲーな…

同窓会って聞いていたのに…いつの間にか元クラスメイトの男友達や自分の彼氏よりも東京から来た男に群がっている。

でも、一番凄いのが…

「これ美味しいから飲みたい」

「ダメだ」

カクテルが入ったグラスを手にしようとするれば取り上げられて、代わりにノンアルコールカクテルのグラスを持たされて膨れているウチのお姫様だ。

「オレ様、意地悪っ」

何が凄いつて、朱雀の総長相手に“イーッ”てやってしまえる事だよな…こんな事をして無事なのは彼女だけだ。

間違えて酒を飲んだらしく、酔って普段より割増しで可愛くなっている。

「梨桜、いい加減に…」

「寛貴ー！」

やっぱり抱き付いた…

「矢野」

寛貴さんが、タカちゃんを呼んで話をしている間、ほっぺたをスリスリしてご機嫌だ。

そして、元クラスメイトの男達はその光景を見ていた。
ガン見：
そりゃ可愛いよな、オレも抱き付かれてスリスリされてえよ。

「少し休ませる」

梨桜ちゃんに抱き付かれたままの羨ましい寛貴さんは、宥めてあやすように背中を撫でてやっていた。

「梨桜、大丈夫？」

姉御に聞かれて梨桜ちゃんは両腕を姉御に向かって伸ばした。

「円香ちゃん大好き！」

「梨桜、私も大好きだよー」

姉御に抱きつく寸前で、寛貴さんが立ち上がって梨桜ちゃんを抱え上げた。

「ちょっと！邪魔しないでよ藤島君！」

空をかき抱いた姉御はキツと睨んでいるけど寛貴さんは余裕な笑みを返していた。

「少し休め、酔っぱらい」

「酔ってない」

梨桜ちゃん、酔ってるからね。

「梨桜ちゃん、目の毒だから休んでおいで」

三浦に言われると素直に頷いて、寛貴さんに抱えられたまま部屋を出ていった。

三浦の視線の先を見ると、顔を赤らめている男が何人もいた。

コイツら、イケナイ妄想中だな…確かに慣れない奴には目の毒だ。

「藤島君ばかりずるい！」

そういう問題じゃないと思うのだが、姉御に言わせると寛貴さんは尽く梨桜ちゃんとの間を邪魔しているらしい。

「許してやってよ、冬休みに入ってすぐに親父さんのいるロンドンに行ってたから、アイツ、梨桜ちゃん不足なんだよ」

まーな、学校で毎日会ってたし、長期の休みも一日おきに倉庫に来ていたからこんなに会わないのは初めてだ。

「あれ？由利ちゃんだ」

拓弥さんがあの、根性ブスに気がついて声をかけた。

「あ……」

オレ達を見ると真っ青になり後ずさった。

良く、ココに来れるよな。根性あるな……

「帰っちゃうの？オレ達の事は気にしないで楽しむばいいのに……それとも、あのオシオキがそんなに堪えた？」

三浦の妖しい笑みにビクツと体を震わせていた。

お仕置きね……

三浦から聞いた内容は、結構エグい制裁だったけど、自業自得らしいし、仕方ないよな……

それより、明日は梨桜ちゃんとプチホテルにお泊まりだ！
そっちの方が重要だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2902ba/>

秋桜 - another story -

2012年1月10日08時46分発行